

第 256 回研究報告会 (1 月 25 日)

アフリカ熱帯雨林の社会と文化

—森の民バカ・ピグミーの狩猟文化と動物観をめぐる一考察—

服部 志帆 (国際学部)

アフリカには 1,000 を超える民族が暮らしており、それぞれの民族は地域によって異なる生活様式と文化を発展させてきた。アフリカの植生図を見ると、赤道直下に広がる熱帯雨林、それを取り囲むようにサバンナ、乾燥草原、砂漠が広がっている。それぞれの民族は、このような自然環境と相互に影響し合いながら日々の生活を営んでいる。研究会では、アフリカ大陸の中央に位置するカメルーン東南部の熱帯雨林地帯に暮らす狩猟採集民バカ・ピグミーの狩猟文化と動物観について報告を行った。

バカ・ピグミーの男性は森のなかにちらばった狩猟キャンプをグループで数日間から数週間にかけて利用し、ピーターズ・ダイカー (カモシカ的一种) やカワイノシシなどの哺乳類を狩猟する。罠に獲物がかかると、発見した男性は槍でとどめを刺す。獲物は解体され、生のままもしくは燻製にされ村に持ち帰られる。肉の一部は近隣に暮らす農耕民に売却されるが、大半は集団内で分配される。彼らは平等社会に暮らしており、個人の所有物や財を持たない。獲物も含めて物は集団内で分かち合われるのである。

バカ・ピグミーは動物をあますところなく利用する。肉だけでなく内臓も食し、残りの部位も道具類の材料とする。とくに毛皮は貴重で、彼らがこよなく愛する歌と踊りの際に使われる太鼓や衣装の材料となる。バカ・ピグミーの歌はポリフォニーという様式で、これは異なるメロディがいくつも同時に展開し全体としてひとつのハーモニーをなすというものである。彼らの文化の核心は歌と踊りであるといってもよいほど、毎晩のように歌と踊りのパフォーマンスを行っている。

動物はバカ・ピグミーにとって食料や道具類の材料として重要であるが、彼らの精神世界とも深く結びついている。彼らは特定の動物を食べると病気になるという信念を持っており、世代や性、経験ごとに食べることができない動物が決まっているのだ。この病気は、動物の形態や生態の特徴とともに語られ、バカ・ピグミーは食を通じて動物の特徴をそのまま体のなかに取り込むと考えているようだ。

なぜこのような食物規制が存在するのか。これは、私たち人間がものごとの因果関係を知りたがる性向を持っていることと関係している。近代医療とはほぼ無縁の環境で経験する病は、不可解で恐ろしくより死に近いものである。動物が病の原因であると考え、彼らは自分を納得させ、さらには不安や恐怖を軽減しているのではないだろうか。また、特定の動物を食べる・食べないということを世代、性、経験によって変えることで、人生における位置を自他ともに確認し合っているとも考えられる。このように動物は食べるのに美味しいだけでなく、病気をもたらす恐ろしい存在であり、病や人生について考えるための豊かな材料ともなっているのである。

第 2 回「宗教と環境」研究会を開催 (1 月 26 日)

佐藤孝則

「科学・技術の発展と宗教者の役割」をテーマに、岩手大学大学院工学研究科の吉澤正人教授から「再生可能エネルギーの普及と可能性」と題してご発表をいただいた。それを受けて、おやさと研究所からは、「科学・技術と素人」と題して辻井正和研究員が発表した。前者は 60 分間、後者は 30 分間の発表で、その後の 30 分間は質疑応答の時間とした。

最初に吉澤氏は次のように述べた。「2011 年の東日本大震災により発生した東京電力福島第 1 原子力発電所の事故は原子力発電への信頼を大きく損ない、インフラとしてのエネルギーに人々の関心を向ける大きなきっかけとなった。震災と共に発生した停電は、あるものが当たり前の電気によって今日の便利な社会が築かれたことへの認識を深めることになり、節電への機運が大きく盛り上がったが、他方、原子力エネルギーの利用を封じられた結果、化石燃料の利用へと時間の矢を逆に戻す結果となってしまった。その影響は、長い間議論されたエネルギー利用による環境負荷の問題に蓋をしてしまった。長い時間のスケールで考えれば、自然エネルギーを中心とした再生可能エネルギーを主体としたエネルギー供給体制の整備が不可欠であることは間違いない。しかし、そこに行き着くまでにはさまざまな課題もある。」

そして、(1) 再生可能エネルギーの種類と現状として、太陽光発電、風力発電、地熱発電、バイオマス発電等を紹介し、(2) 再生可能エネルギーの課題、(3) 再生可能エネルギーの普及について発表した。

一方、辻井氏は、(1) 自然哲学から科学へ、(2) 素人と科学・技術、(3) 科学・技術から宗教へのフィードバックについて発表し、「科学は〈分ける〉、宗教は〈つなぐ〉」が基本であることを論じた。



『グローバル天理』  
合本のご案内

これまで出版された『グローバル天理』の合本を頒布しています。これは 2000 年から 2011 年までの各 1 年分 (12 月号) を 1 冊にまとめ、簡易製本したものです (頒価は 200 円)。

公開教学講座の会場と、研究所事務室のみで取り扱っていますので、お求め下さい。郵送による頒布はお断りしております。お問い合わせは郵便か FAX、もしくはメールにてお願いします。